

---

---

## イタリア現代思想における「声」の問題系——アガンベン、カヴァレーロ、カッチャーリ

江川空(京都大学)

---

---

1967年、フランスの哲学者ジャック・デリダが『グラマトロジーについて』のなかで、西洋哲学を「音声中心主義」として批判して以来、この仮説は広く認知されている。一方、フランスの隣国イタリアでは80年代以降、以上のような動向と並行して、エクリチュールよりも声を中心に据えた研究が盛んに行われてきた。本発表の目的は、イタリアにおける声の研究を概観し、エクリチュールにたいする声の問題系を明らかにすることにある。その際、本発表が導き手とするのは、イタリアを代表する三人の思想家、ジョルジョ・アガンベン(1942-)、アドリアーナ・カヴァレーロ(1947-)、マッシモ・カッチャーリ(1944-)、この人たちである。

まず、アガンベンについては、『言語活動と死』(1982)から『残りの言語』(2024)までを考慮に入れ、その思想を辿ってゆく。アガンベンによれば、西洋哲学はそもそもグラマトロジーに基づいて発展しており、そのなかで声は「もはや純粋な音ではないが、いまだ意味ではないもの」として宙吊りにされてきたという。ここから、アガンベンはそうした声のうちに哲学と詩が接触する「閼」を見だし、西洋形而上学を批判するための契機を見てとるのである。

次に、カヴァレーロについてだが、彼女はプラトン研究者とフェミニストを兼ねつつ、声の身体性を強調している。その著作『もっと多くの声に』(2003)でカヴァレーロは、西洋哲学がプラトン以来、視覚中心主義と男性中心主義に依拠しながら発展してきたと述べ、声が身体とともに意味や精神、文字にたいして劣位に置かれてきたと主張する。ここで重要なのは、そうして排除される声は何よりもまず、「女性の声」でもあったということだ。

さいごに、カッチャーリは上記の二人と同じように、西洋哲学における文字や意味の優位性を念頭に置きつつ、声、音、聴覚の問題に焦点を当てる。とりわけ、その芸術論集『踊る神』(2000)では、万物の根源に声、音が存在しているという世界観が語られ、詩や音楽をある種の範例として独自の芸術論が展開されている。また、彼は音楽家であるルイーダ・ノーノとともにオペラ「プロメテウス」も共作しており、上記の二人とは異なる実践の立場から声の問題にアプローチしていることも特筆すべきだろう。

三者に共通しているのは、西洋哲学がアルファベット文化のもとで発展してきたことに批判を加え、エクリチュールよりもむしろ声の復権を唱えていることである。本発表では以上を明らかにしたうえで、現代社会のなかで声が抱える諸問題について三者の思想がどのようなアプローチを可能にするのかを論じ、むすびとしたい。